

第30回記念筑後川フェスティバル in 大川

30回記念シンポジウム

『兄弟3河川が集い、互いを称え、自慢する』

ー治水と利水そして舟運の歴史を語るー

(九州河川災害ネットワーク交流会議)

報告書

平成 28 年 7 月

NPO 法人嘉瀬川交流軸

第30回記念筑後川フェスティバル in 大川

30回記念シンポジウム

『兄弟3河川が集い、互いを称え、自慢する』

ー治水と利水そして舟運の歴史を語るー

(九州河川災害ネットワーク交流会議)

とき： 平成28年6月11日(土) 14:15～16:45

ところ： 福岡県大川市 国土交通省筑後川河川事務所「はなむね館」

これまで筑後川フェスティバルでは、九州内の河川で活動する NPO 法人等の諸団体が交流する場として位置づけ、災害・防災を中心に環境や歴史等の幅広いテーマについて意見交換をしてきました。今回は、筑後川フェスティバルが30回記念となったことに呼応して、筑後川と兄弟縁組を結んでいる利根川と吉野川の代表をメインゲストに迎え、「お互いの川を褒めあい、自分の川を自慢する」シンポジウムを開催しました。

シンポジウムプログラム

■基調報告

1) 利根川からの報告

公益財団法人ハーモニーセンター名誉理事長 大野 重男氏

2) 吉野川からの報告

NPO法人新町川を守る会理事長 中村 英雄氏

3) 筑後川水運の自慢話

NPO法人大川未来塾理事 本間 雄治氏

(休憩)

■熊本地震の報告

金子好雄 NPO法人白川流域リバーネットワーク理事長

松川喜美子 白川わくわくランド館員

■パネルディスカッション

□3兄弟河川交流が目指すものとは

□参加団体からの川自慢・歴史自慢も参画(筑後川だけには任せられない)

○ コーディネーター NPO法人嘉瀬川交流軸 荒牧 軍治

○ アドバイザー NPO法人筑後川流域連携倶楽部 駄田井 正

(社)北部九州河川利用協会 山本 隆利

■この事業は一般社団法人北部九州河川利用協会の支援を受けて実施しました。

第30回記念筑後川フェスティバル in 大川

30回記念シンポジウム

『兄弟3河川が集い、互いを称え、自慢する』

ー治水と利水そして舟運の歴史を語るー

(九州河川災害ネットワーク交流会議)

報告書

コーディネイター 荒牧軍治 (NPO 法人嘉瀬川交流軸理事長)

時間になりましたので開会させていただきます。この交流会議は2時間半の時間をいただいています。皆さんに今日の進行表を配布していると思いますが、タイトルがすごく大げさなものになっています。一番大事なタイトルは「第30回記念筑後川フェスティバル in 大川」と「記念」がついているところです。これまでの筑後川フェスティバルでは、その中核的なイベントとして筑後川フェスティバルに集まって来る各種河川団体、NPO 法人がそれぞれの活動を報告して交流しようという趣旨で「九州河川災害ネットワーク交流会議」を開催してきました。私は、8年くらい前でしょうか、NPO 法人有明海ぐるりんネットの代表として招待を受け、初めて参加しました。



私も参加している第30回記念筑後川フェスティバル in 大川実行委員会で、「今回はお祭りだ」ということになりましたので、その趣旨に沿って交流会議の企画を考えることにしました。今まで通り交流するだけでは「お祭り」にはならないと感じていた時に、筑後川流域連携倶楽部が日本水大賞を受賞したとのビッグニュースが飛び込んできました。この交流会議の前に開催した首長会議で駄田井先生が筑後川流域連携倶楽部のこれまでの活動を報告されていましたが、私は「筑後川は、利根川・吉野川と兄弟河川となったことで全国区になったな」と感じていましたので、お祭りの企画として「兄弟3河川が集い、互いを称え、自慢する」と題するシンポジウムを開催しようと考えました。まずは「ほかの川を褒めてください。そして自分の川を自慢してください」、その上で3河川交流を深める中で見えてきた共通点、ユニークな点を明らかにしましょうという趣旨です。川の歴史を語るとき、通常我々は治水・利水の視点で語りますが、去年の交流会議で聞いた利根川からの報告では「利根川の付け替えは舟運の利便を考えて実施された」との趣旨が報告され、意外な感じがしました。今日、基調報告をお願いした本間さ

んが精力的に筑後川、佐賀平野の舟運の歴史を調査しているので、「その報告をして」とお願いしました。



今回は通常の九州河川災害ネットワーク交流会議のスタイルを変更して、利根川・筑後川・吉野川3河川交流に重点を置いた内容で進めることにしました。ところが、この企画でプログラムを決定した後で熊本地震が起これ、白川わくわくランドも被災しました。それに触れないわけにはいきませんので、白川わくわくランド館長の金子先生と館員の松川喜美子さんから熊本の状況の報告をお願いすることにしました。

趣旨説明が少し長くなりましたが、それでは最初に利根川からの報告をお聞きしたいと思います。公益財団法人ハーモニセンター名誉理事長の大野重男さんです。よろしくお願いいたします。

基調報告

1. 利根川からの報告

公益財団法人ハーモニセンター名誉理事長 大野 重男氏

只今ご紹介いただきました公益財団法人ハーモニセンターの大野です。私が活動しているのは、利根川の河口から85kmくらい上流で利根川に合流する小貝川を中心とした流域です。今日も千葉から虫明先生をはじめ大勢ここに来させていただきました。昨日の朝に常磐線の藤代を出て、こちらに来ました。こちらに来て携帯を忘れてきたことに気が付いて、女房に電話したら「メガネのケースだけ持って行って中身を入れていなかったでしょう」と言われました。最近耳が少し遠くなってきたのでちょっと良い補聴器を買ったんです。

こっちに来て補聴器に電池を入れてくるのを忘れていました。今、三重苦の状態にあるのです。さらに、今日みなさんの前でお話をするということで、上着を持っていたのですが、それを久留米駅



のベンチに置いてきてしまいました。そんな状態ですから、およそこれから先の話がまともにいくわけはないと思っていますが、30分間も時間はいりませんから、最初の皮切りをさせていただきたいと思います。

公益財団法人ハーモニィセンターというと大きく聞こえますけど、50年前、まだ私が若かったころ、高校生の頃から子供会をやっていたし、大学生の間も続けていました。就職するときも、行ったら喜んでくれる子供たちと付き合う仕事をライフワークにしたいと思っていましたが、一時期、東京都の公務員になりました。警視庁に8年間務めました。もちろん仕事は一生懸命やったのですが、仕事の傍ら子供会の方も一生懸命やっていました。ところが途中で子供会の傍ら仕事に行っていることに気が付いたのです。一回しかない人生なので、自分に正直に生きようと思って、子供会をやっている方が楽しいですから、そちらの方を主にして、警視庁の方をやめることにしました。警視庁をやめたのは、給料が安かったからですが、それが一番よかったなと思っています。もし給料が高かったら引きずられたと思います。「これくらいだったら自分で何とかやれるな」という自信を警視庁、公務員の給料は与えてくれました。好きなことを思いっきりやれるようになったのは非常によかったなと思います。子供会をやるといっても、誰かに頼まれてやるわけではありませんので、必要なものはアルバイトをして賄うとか、必要なものは自分たちで作るとかやってきました。

私はいま81歳になりましたが、「やってて良かったな」と思う日々を過ごしています。健康というわけにはいきません。耳は遠くなるし、足腰も弱くなりました。今日も、フェスティバルの開会式会場からここに来るのに一休みしなければたどり着きません。ただ、考えることはまだあと1、2年は大丈夫だと思っています、「最後の炎かな」と考えています。

川との縁を作ってくださったのは、地域交流センターをやっておられた田中栄治さんという方です。田中さんが新橋にいろいろな業界の方たちが出会うサロンを作っておられましたので、私もそのサロンに参加していました。私はその当時、ボーイスカウトとか子供会とかYMCAとかが参加する青少年団体の日本全体の会長をやっておりました。そういう状況で田中さんに「一緒にやろうよ」と誘っていただきました。河川法が改定されて、いろんな人の力を合わせて河川づくりをやっているかなければいけなくなっていました。「多くの人が喜んで河川に来てもらうような時代になったので一緒にやりましょう」

誘われて行ってみましたら、国土交通省の吉川和秀さんという素晴らしい人がおられました。吉川さんは「福祉と川の勉強会」というのをやっていました。私が入ったので「教育と福祉と川の勉強会」をやろうということになりました。そこで勉強会をやるだけでなく、全国で関心のある人と情報交換したり学びあったりする全国の集会を、北海道から九州まで開いていこうということになり、開催し続けて10回くらいになりました。吉川さんが釧路で開催されたのは第3回目でした。吉川さんはもうお亡くなりになりました。今、我々は吉川さんの後継者として事業を続けていますが、吉川さんが最後の事業として千葉でその会議を開催され、「これからも継続したい」という意志を表明されたことが、それが利根川流域交流会へとつながったと思います。昨日講演されたうちの会長は名会長ですが、「利根川交流会は、まだできて2、3年くらいにしかありませんけど」と謙虚におっしゃっていましたが、そのような経緯、根っこがあったうえでの2年間だということをし

上げておきたいと思います。

本題の「私と川の縁」に入っていきたいと思います。河川は、治水と利水だったのが、新たに環境が入り、流域にいる人たちが「川と付き合ってたかった」と思えるようなことをしなければいけなくなりました。私の本職は青少年教育で、子供と付き合っているのですが、子供時代に自然とたくさん付き合う機会を作ることが大事だと思っていろいろなことをやっています。そのうち、ポニーに出会いました。ポニーに触れるとメキメキ元気になる子供たちがたくさん出てきたので、「ポニークラブを作ろう」と思い立ちました。多分、日本で初めての取り組みだと思います。私は馬に乗ることはできませんでしたが、子供たちに馬と触れる機会を与えたかったのです。自分たちでお金を出し合って、馬を買い足していった今は100頭くらいになっていると思います。いろいろな公園で指定管理を受けて、我々のポニーを持ち込み、スタッフを持ち込んで公園の管理を任せられています。相模原市の麻溝公園とか、目黒区の碑文谷公園とか、葛飾区の水先公園とか、年間7,80万人の子供たちがやってきてくれるようになりました。

私たちはお金を出し合ってハーモニセンターを立ち上げましたが、私たちのささやかな誇りは、文部省の補助金をもらってやっているのではなく、自治体の助成金でやっているものではありません。自分たちのやりたいことを自分たちの仕事として成り立つように努力しようとしてやってきたことがみそだと思っています。いまは100頭くらいになっていますが、その中には子供たちのお金も入っていますし、お母さんたちのへそくり一万円ずつというのも入っています。

吉川さんは国交省の下館河川事務所の所長もやっておられ、「大野さん、素晴らしい人がたくさんいるから、大野さん藤代はどう？」と誘われました。我々も「川べりに活動拠点がほしいな」と思っていたのでそう吉川さんに申し上げたところ、吉川さんが「明日行きましょう」と言われ、翌日、小貝川の上の下館の方に案内され、「こんな素晴らしい人がいる」と紹介されました。小貝川の活動は本物だと思ったものですから、その当時私は町田に住んでいたのですが、町田から小貝川に引っ越してしまいました。本籍まで移して茨城県民になってしまいました。

藤代で活動するにはどのようなことをやればよいかを考え「3次元プロジェクト」という名前を付けた活動案を作りました。「陸地と水辺と空の空間」を活かして子供から高齢者まで、健常者も障



がい者も、「みんなそこに来たら元気になる」仕掛けを作りましょうということです。それを新たな川辺の賑わいとして全国のモデルになるような事業をやりましょうというので「小貝川プロジェクト 21」というのをやり始めました。

もう一つ重要なポイントは、文部省の野外活動でも川べりの野外活動でもそうですが、大体日曜日とか休日とかを利用して実施します。学校のシステムが邪魔をしてそのような時間しかありませんが、われわれは日曜日、休日以外の日常も活動しようと考えました。土日だけ行って、イベントをやって片付けて帰るのではなく、「いつ来ても」できる川べりの活動をやりたかったのです。



馬を持ち込んだらその日から常設・日常になりました。機械だと倉庫に入れば鍵をかけておしまいますが、馬を飼うことにしてからはそうはいきません。馬を厩に入れて鍵をして「後は頼むね」という訳にはいきません。常設化を図る一番良い道は、馬を5, 6頭飼うことです。何もしなければ餓死しますから、誰かが世話をしないとイケない。そういう人が来ると日常になります。災害に備えて役に立つ人を育てるといって一週間くらい研修をやったって、役に立たないんですね。ボランティアに行っても一生懸命働いても、「俺はどこに寝れば良いの？私の食べ物はどこにあるの」と心細いことを言うようなボランティアになったりします。我々のところで訓練しているのは、それら全てを自前でできる人材です。日常的に訓練をしている人達が「いざ」と言うときに役に立つのです。川の知見を一週間特訓で聞いたって分かりません。川を毎日見ているから「変化」や「危なさ」に気がつくのです。その様な「地道な活動をやりましょう」というのが我々の団体も目標でした。

私は、小貝川の河川パトロールの人達を見ていました。パトカーを真似たような車で、いかめしく行くわけです。散歩している人達は「自分たちが悪いことをしているのでは」という気になるのです。10年間の活動の中で何人もの河川事務所の所長さんにお会いしましたが、彼らに「屋根を取ってオープンカーにしたらどうですか。河川を散歩している人達との交流が図れますよ」と提案したら、「オープンカーは良いね」と言う人はいましたが、実際にオープンカーを入れた人はいません。「もしオープンカーが駄目なら、半分だけ車を止めて馬でパトロールしては」と提案もしました。「それは良いね」と言う人はいましたが、それ止まりでした。

しかし、めげずに言っている内に利根川下流事務所の中村さんと言う素晴らしい人がいて、先輩達からの話しを受け継いでいたらしく、私が提案したら「大野さん、それやりましょう」と言って、私に相談もなしに利根川流域交流会の第1回目の会議で「私の任期中にやりたいことは、舟運の復活、河口の自然再生、それに河川パトロールに馬を導入したい」と言い出しました。私は椅子から転げ落ちそうになりました。「善は急げ」ですから所長の考えが変わらないうちに、協定書を結びました。サインをし終えた後に所長から「誰か信用のおける方に保証人としてサインをして貰ったかどうか」と相談がありました。一回書き上げた協定書を破棄し、「虫明先生に立会人として印鑑を貰うよう連絡してみて」と言われたので、相談したところ快諾を得ましたので、虫明先生がバックに付いた協定書を所長とハーモニーセンターが協定を結んだのです。

馬の手配等で少し遅れていますが、この写真にあるような青年達が、馬に乗る訓練とゴミ拾いを開始しました。



私は、一つ何か始めますと「こんなことできる。あんなこともできると」と考えるのが得意なのです。ここでの馬の事業が広がってくると、日本における馬と人の世界を変えることができると思っています。乗馬をやる人達は「馬が好き」と言うことだけでやっていますが、ここでやろうとしていることは、「馬が好き」と言うだけでなく、「社会貢献と二人連れの乗馬」を新たにやっというとしているのです。農水省関連だけで無く、もっと「馬と人の関係」を拡げていって、河川敷と堤防をバックにしながら馬と人間の間を作っていく事業を、全国の心優しい人達が全国の川べりで開始することを望んでいます。大川や久留米をはじめ、たくさんの心優しい人達が居ることを知っていますから、始まるのではないかと期待しています。余り大きな声では言いませんが、この所長さんとも話をしましたし、昨日、多くの写真も見ても戴きましたので、具体的な動きがあるのではと私は思っています。この話に反対する人はいません。一級河川が日本には100位ありますし、一つの河川には3つくらいの河川事務所がありますから、一つの事務所に一つの拠点を作ると、300の拠点を造ることになります。1箇所につき5頭ずつ馬を入れたとしたら、1500頭になります。この話を北海道の馬産農家の人に話したら、「日本に新しい馬産業ができる」と言われました。本当なんです。一頭の馬には馬具等の道具が必要で、膨大な生産基盤が必要になってきます。私は北海道出身ですが、日本ハムが勝つだけでは元気になりません。10年間優勝しっぱなしと言うことなら良いのですが、勝ったり負けたりですら、元気になったりクシュンとなったりで、なかなか元気になりません。3年後に500頭、5年後に1000頭の馬が必要になってくる。大人用にはこれくらいの馬が何頭必要、子供用にはこれくらいのサイズの馬が何頭必要、幼稚園生用は、小学生用はと数えて計画をちゃんと作って、その計画を受け止める所があれば、日本の馬産地の振興になります。

その様な仕事を「自分の仕事だ」と喜んでくれる青年達がたくさん居ることも知っています。新しい雇用機会の創設になるかもしれません。今の時点で馬をやろうとすると、乗馬クラブの入会金が高く、年会費も払った上に、一回45分ごとに5千円とか1万円とか必要で、「とてもそんな高いものはやっていけない」と感じるでしょうが、日常的で社会貢献に基づいた乗馬の世界を作りあげるというでっかい仕掛けにしてみると、料金をフリーにするようなこともできるのではないかと思います。川と乗馬を結びつけたことで10年後には馬産地から私に表彰状が来るのではと思っています。古賀先生ではないけれどもやがて表彰状が来て、記念館かなんかできるのではないかと思います。

昨日、虫明先生が水循環基本法のことを話されましたが、私はあのような法律が何十年もかけて準備されていたことに驚きました。河川水防法が改定されて河川協力団体なども作って川の後継者を育てていかなければと言うことになりましたが、「無理」です。これから後継者を育てるには、子どもの頃からやらないと駄目です。小学校1, 2, 3, 4年生を水防少年団に入れていきなり土嚢を作る作業をさせても、2回目から来ないと思いますよ。いくら「国のためになる」と力説しても、土嚢を作って、エイヤと積んだって、楽しくなければ続きません。作業を楽しくやって、「また行きたい」「また行きたい」「学校に行くより、そっちに行きたい」となるようではなくては駄目だと思います。「経験したことは一生身についている」というような場づくりが必要です。その場所としては川べりが良いと思いますし、道具としてはこの「騎馬パトロール」が良いのではないかと思います。この「筑後川フェスティバル in 大川」を契機にして、九州に騎馬パトロール隊ができると良いなと思います。まず、20箇所くらいできるとみんながひっくり返るんじゃないでしょうか。



もう一つ申しあげたかったことは「日本水大賞受賞おめでとうございます」ということです。筑後川流域連携倶楽部が受賞したことは、少々遅きに失していると思いますが、本当の意味で日本水大賞受賞にふさわしい団体が受賞されたと思います。私も少しは関わらせて戴きましたが、表彰式の前に現場に来て、駄田井先生に「おめでとうございます」と直接言えたことは良かったと思います。筑後川新聞は子ども達の目線で書かれた新聞です。まるで子ども新聞みたいです。あれだけたくさんの事業をやっている背後に優しい大人達がいるなと感じます。この子どもに対する教育力はすごいと思います。文部科学省はもたもたしていますが、教育は現場です。ここです。文部科学省には任せられません。我々でやっていく。私は「水辺の学校を作ろう」と主張しています。川辺でキャンプをやると、子ども達は「帰るのは嫌だ」と言うのです。乗馬クラブ・ポニークラブを作ろうというのはもう「遅れている」のです。これからは乗馬クラブ・ポニークラブ附属小学校を作るべきです。「その様な学校の卒業生達こそ社会で役に立つ」という時代に作り替えていかなければいけないのです。



虫明先生の昨日のお話の中で大事なことは、「政府が号令かける時代じゃないよ」と言うことだと思います。筑後川流域連携倶楽部がやっておられるようなことが、新たな仕事を作っていく要になると思います。「どれくらいことを皆様はやっていらっしゃる」のです。

これからお見せする映像を頭に焼き付けて戴いて、これを何時実現するかを考えて戴きたいのです。またお邪魔させて戴きます。今日は有り難うございました。

これからお見せする映像を頭に焼き付けて戴いて、これを何時実現するかを考えて戴きたいのです。またお邪魔させて戴きます。今日は有り難うございました。

荒牧 軍治コーディネイター

どうも有り難うございました。それでは続きまして吉野川からの報告をお願いいたします。今日報告して戴くのは、NPO法人新町川を守る会の理事長を務められています中村英雄さんです。どうぞよろしくお願いします。

基調報告

2. 吉野川からの報告

NPO法人新町川を守る会理事長 中村 英雄氏

徳島から参りました新町川を守る会の中村です。この橋は、吉野川の河口近くに架かっている橋です。平成24年くらいにできた橋ですかね。まだ新しい橋です。川幅が1.3km位あります。非常に幅が広がっています。吉野川は長さが194kmですが、河口は非常に幅が広がっています。

吉野川交流推進会議と新町川を守る会の活動をとおして、故郷の川、四国三郎・吉野川の魅力

を、全国にPRするとともに、地域一体となって、吉野川を通じた交流を深めるため、行政機関や民間団体と協力し合い、色々な取組を行っています。

平成11年から「アドプトプログラム・吉野川」を実施しています。アドプトとは英語で「養子にする」と言う意味です。みんなで吉野川を自分の子どものようにかわいがろうということで、自分たちが担当する区間で清掃・美化活動を定期的に行います。今は、1年間に3回くらい行っています。活動が続けることで、さらに吉野川への愛着が湧いてきます。現在では138団体、約1万4千人が参加しており、その総延長は92.6kmにもなっています。私たちの会は、毎月1回第2日曜日にゴミ拾いをしています。毎回10人くらいは来ますが、多いときには100人くらいが上がってきます。このアドプトプログラムというの

は、全国に拡げていくと本当に魅力的なものになっていくと思います。この会の会長は3代目ですが、その会長を阿波銀行さんがやってくれています。民間を中心にやっている組織で、段々大きくなってきています。今の会長も非常に熱心な方で、非常にユーモアがあり、ここの駄田井先生によく似ている方です。酒の強い方で「酒の飲み比べをしないか」とよく言われます。駄田井先生からは「20本以上酒を持ってこい」と言われましたので、徳島の酒を持参しています。このアドプトプログラムは徳島の誇る制度で、全国に広がっていくと素晴らしいものになるのではと思っています。民間が先頭に立って、行政が後押しすると、本当に川に愛着を持つ人がすごく増えてきます。

「新町川を守る会」は平成2年に始めまして、毎月1日と第3土曜日は毎回清掃をしようと決めて、かれこれ25年くらい続けています。雨がなんぼ降っても、警報が出ていてもこの清掃だけはやります。この30年間で止めたのは1回だけだと思います。中には、川の中に落ち込む人もいます。最初は、年齢の高い人が多かったのですが、今は若い人が増えてきました。今

は呼び掛けはしないのですが、20人くらいは確実に集まります。「こんな雨の日は来んでもええのに」と思いますが、いっぱい若い人が来るから止められんです。徳島の中心街から6km掃除するんで



ひろがる！つながる！ アドプトプログラム 吉野川



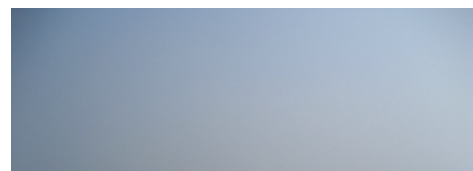
美しい吉野川を自分たちの手で守ります



河川清掃活動



毎月1日と第3土曜日に新町川 助任川等の清掃を行います



吉野川の清掃も毎月1回行っています

すが、今でも4トン車に来てもらっています。「川が汚れとったらすぐに掃除をする」と決めています。この川の周りには「ごみを捨てるな」という看板は一切ありません。「ごみは私の方で掃除しますから、看板は立てなくて良い」と県の方には言うてあるんです。吉野川の清掃も毎月1回行っています。

山の方にも行っています。時々、早明浦ダムに水がない時、大川村の役場が映るときがありますが、その大川村にも平成14年から行っています。酒を飲んでいるときにここの村長に「森づくりは千年かかりますね。千年間貸してくれますか」と聞いたら、「貸しますよ」ということになって、3001年まで借りることになりました。年に4、5回は大川村に行きます。今月の24、25日に行くのですが、針葉樹（杉やヒノキ）の間に広葉樹を植えています。なかなか大変ですが10年続けていると確実に森が変わってきます。今度も下草刈りをやりますが、大川村の人たちと話し合いをするのです。大川村は人口が400人くらいで、離島を除いたら人口が一番小さな村です。私はこの大川村のPR大使です。

ここに早明浦ダムがありますが、当時400億円くらいでできているのです。ハッ場ダムはその3倍も4倍もかかります。5000億くらいのダムが多く聞かれますから、400億円は少ない額です。

こういうところには普通、桜は植えないでしょう？ここは徳島マラソンのコースですが、そこに「NPO法人蜂須賀桜と武家屋敷の会」と協力して桜を植えています。大体こんなところには植えさせてくれないんですが、徳島ではできるんですね。不思議なところです。

国土交通省ではこのように干潟の生物観察なんかもやっています。シオマネキとかがたくさんいますが、その調査も私たちが2年も3年も続けてやっています。

吉野川も外来種が非常に増えてきています。それを皆さんに見てもらって、その草を抜いたりもしています。

上流の方は、早明浦ダムまで出かけ、中流ではカヌー体験をしたり、下流では川魚観察会とかを開催しています。水難事故防止講習会も毎年やっています。「元 福山平成大学」の小谷先生と行

源流の森を混交樹林に変えるため3001年の森と名付け植林を開始 平成14年4月



吉野川を桜並木や四季折々の花で彩る 四季彩マラソンロード



徳島県固有の蜂須賀桜を植樹

官民一体となって
吉野川を花でいっぱいになります。



徳島県 恵みの宝庫 吉野川「創造プロジェクト」

特定外来生物から吉野川河口干潟の 海浜植物を守る！



国土交通省徳島河川国道事務所
吉野川現地「フィールド講座」

っています。救命スローバッグの使い方などをなかなかユーモアたっぷりに教えてくれます。

これは「まるごと吉野川“魅力再発見”講座」の光景です。今まで徳島でもこのような講習会はいろいろありましたが、4、5年前に駄田井先生のところに寄せてもらった時に、「筑後川まるごと博物館」の話を聞いてこら徳島でも「まるごと吉野川をやらんといかん」と思い立って、年5回くらいは開催しています。3河川兄弟縁組などを結んでいくと、参考になることがたくさんあります。私も大野さんのポニーをやりたいんですよ。ポニーをやりたいんですが、すぐ熱中す

るたちなので困っています。国土交通省には「ポニーをやりたい」と言ってあります。

これは今切川河口堰です。子供たちに水の大切さを学んでもらっています。これも年に3、4回開催しています。

これは吉野川フェスティバルの光景です。筑後川フェスティバルは今年で30回目だそうです。吉野川フェスティバルも今年で28回です。私も平成7年くらいにここの実行委員長を引き受けてもう何回になりますか。最初、平成元年の1回大会は、徳島市が力を入れて予算が1億円だったのです。どんどんどんどん減ってきて今は500万円くらいになっています。市長が「挨拶に行っても誰もいない。止めたい」と言い出したので「私が引き受ける」と言って引き受けたのです。今の予算は200万円を切っているんです。しかし、来る人は最初の頃よりはるかに多いのです。警察にいつも「何人ですか」と聞かれて、毎回「5万人です」と答えています。実際はもっと来るんですが、それを言うと「警備が少ないのではないか」と言われるので、毎回「5万人です」と言うています。ビールや焼き肉を売ったりしてやっています。私の時に火を消してはいかんと思ってやっています。これは吉野川フェスティバルに皆さんが集まってくれた時の写真です。

今までは徳島でやっていたのですが、それぞれの地域も元気にやっているのでも「河口だけでやったらいかん」ということになって、吉野川の少し上流側の吉野川市で開催することにしました。吉野川の魅力を皆さんに知ってもらわなくてはいけないということで、下流の私たちだけでなく上流にも広げる方向で考えています。やはり、皆さんが参加してくれることによって違った面が出てきます。今年は東みよし町で開催します。今日ここにも東みよし町からも来ていただいています、非常に力を入れてもらっています。

水難事故防止講習会を実施



ライフジャケットや救命用スローバッグの使い方を覚えます。

まるごと吉野川 魅力再発見”講座

吉野川の魅力を伝えるため、様々なテーマの講座を開催します



講演会



現地見学会

徳島県 恵みの宝庫 吉野川”創造プロジェクト

吉野川フェスティバル



様々なブースの設置やイベントを開催しています



来年はラフティングの世界大会が徳島県三好市で開催されます。今年はプレ大会が開催されます。今度8月に吉野川に来られる人は、ラフティングをされたらどうかなと思っています。なかなか迫力があって、他所にはないところだと思います。

新町川での活動を改めて紹介します。新町川は一番下流の徳島市街を流れている川です。戦後、昭和40年ころは非常に汚れていました。昭和40年代はCODで40ppm位ありました。今はすごくきれいになりました。住民が掃除をする、イベントをする、たくさんやりました。予算があってもなくてもやります。船を浮かべたりしていくと、皆が川の方を向いてきて、どんどん川がきれいになっていきます。今、船を4隻持っていますが、最初遊覧船を始めた時は1年間に乗船者が100人位でした。去年は3千人を超えましたし、今年もまた増えていくだろうと思っています。前は無料だったのですが、100円取るようになって今は200円です。200円は安いんですが、市民がたくさん乗りますからね。「あそこがきれい、ここがきれい」といった言葉が川づくりに反映されます。市民が褒めてくれるもんだから、やっぱり行政の方も力が入ってきます。平成17年に河川管理が県の単独事業になってしまったでしょう。それから一気に止まってしまいました。もう少しできるともっともっとできるようになるんですがね。こんな風にいろんな人が船を利用します。目の

見えない人も乗って喜んでくれたりします。昨日は220人位が乗っていました。この遊覧船が走ると徳島の人手は振るんですよ。乗ってる人がそれを見て、「幼稚園の送迎と思われているんじゃないか」と言っていましたが、20年間も手を振り続けると、みんな手を振るようになってしまいました。保育所の子供たちが乗ると皆さんが関心を持ってくれますし、子供のころから水が好きな子ができるような気がしています。

水もきれいになってきて魚も増えて

新町川の魅力を紹介！



無料遊覧船運航



- 新町川・助任川の一周6キロを毎日無料運航
障害保険200円)

新町川で結婚式



結婚式

栈橋から始める
リノベーション



宴会

きました。今は 40 種類くらい釣れるんじゃないですかね。ほとんど海水ですから、タイやカレイやスズキが釣れたりしています。この間は 80 cm のスズキが釣れました。

新町川にこんな素敵な台船ができました。幅が 5 m で長さが 40 m あります。川の中にこれを作ることを許可してくれたのです。行政が作ることはあるかもしれませんが、民間が作った例は全国にもないんじゃないかと思います。大体は許可が出せないような場所ですが、杭を打って止めているのです。ここではいろいろな環境教育をやっています。いろいろなイベントがいっぱいあって、ここでお酒を飲むイベントが一週間に 2 回くらいあったりします。水際コンサート、7 月 7 日の水辺で乾杯、詩の朗読＋フルート演奏、ピアノの演奏などを行っています。ピアノの演奏をやっているのは徳島県知事です。知事の所に行って「ちょっとピアノ演奏をお願いします」と頼みます。川べりでイベントやるといろんな人がたくさん集まってきます。

これはマルシェの風景です。コンサート、アートフェスティバルなどが水辺に出てきて、毎日のようにイベントが実施されています。

川以外にも国道花いっぱい運動にも取り組んでいます。国道に 3 km くらい花を植えています。5 月の 15 日と 22 日にもやったのですが、草花を 15000 本植えました。ポニー位手間がかかるんですよ。水をやらなきゃいけないでしょ。夏は昼に水やりしたら駄目なので夕方の 6 時から 8 時まで水やりをします。ロシア、イタリア、アメリカ等の国際ボランティアの人たちや学生も参加して植えてくれます。5 月 15 日には 270 人くらい集まりました。予算は全部自前で集めてくるんですよ。ボランティア作業に参加する人とお金を出して参加してくれる人がいます。「力を出せんけど、お金なら出しましょう」という人がいるのです。草花を植えるのに 150 万円から 200 万円くらいかかりました。今ペチュニアとサチュニアと植えています。ペチュニアだと 1 本 70 円くらい、サチュニアだと 300 円少々かかります。花壇が作られてつつじが植わっているんですが、国土交通省には「さわらんように。私たちが剪定します」と言うてあります。今でも朝の 5 時から 9 時くらいまで作業をやっています。夜の 9 時じゃなく、朝

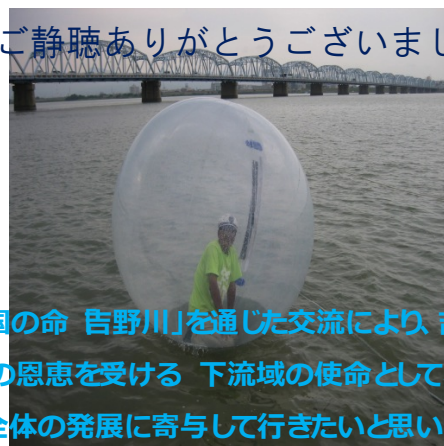
とくしまマルシェ



最終日曜日のマルシェ



ご静聴ありがとうございました



四国の命「吉野川」を通じた交流により、吉野川の恩恵を受ける下流域の使命として、流域全体の発展に寄与して行きたいと思いを。

の9時ですよ。3 kmあると思います。

「自分たちの町は自分たちできれいにする」ということでやっています。今度徳島の町に来られた時に見ていただけたら良いと思いますが、国道が花いっぱいになっています。これをほっておいて皆が「汚い、汚い」と言い出したら、行政が管理しやすいように埋めていくんですよ。花を植えて、潤いと安らぎのある風景を作るために自分たちの手で植えています。やはり、参加者がどんどん増えてきて、5月、9月、12月の年3回植えるようにしています。町が変わってきたように思います。どうもありがとうございました。

コーディネイター

本当に有り難うございました。いよいよトリです。このプログラムを企画するときに本間さんに「筑後川水運の自慢話をして」と頼みました。本間さんと付き合って何年くらいなるでしょうか。7、8年になるでしょうか。最初は、水の風景の話を本間さんから聞いた気がします。そのうちにデ・レイケ導流堤のこともあったので「筑後川の水運のことを調べてほしい」と頼んだと思います。なぜ若津の港があれだけ盛んになったんだろう。なぜ滅んでいったんだろう。そのことを教えてほしいと頼みました。私も研究者の端くれですが、「私はあんなに熱心に研究したことはないな」と思えるほど、集中的に調べ上げてくれました。「この人は何者なんだろう」と感じ、今でも正体はわかっていません。

大川で筑後川フェスティバルを開催することになり「利根川、吉野川に発表してもらおう企画を考えているので、本間さん、殿（しんがり）で必ず話して下さい」と依頼しました。本間さんには5時間くらい時間をあけて話を聞きたいのですが、今日は30分間しか時間がありませんから、話を絞ってお話しいただきたいと思います。本間さん、よろしくお願いいたします。

基調講演

3. 筑後川水運の昔自慢（下流の川港 大川若津港）

NPO法人大川未来塾理事 本間 雄治氏

大変期待されたご紹介でしたが、話をさせていただきます。吉野川と利根川の話は、「現在のロマン」と私は感じましたが、今からお話しする私の話は「100年前の大川のロマンです」。

「筑後川水運の昔自慢」とタイトルを付けました。今日、筑後川フェスティバルがあっているところが大川の若津港です。江戸時代の筑後川の絵図を示しています。これは林田正助の若津蔵があったところで、私たちはいまこの若津港にすることになります。筑後川昇開橋かここにありますが。これは江戸時代後期の絵図です。今我々がいる「はなむね館」はここです。



江戸時代後期の筑後川若津港はどういう状況だったのかを調べたら、大変なことが分かりました。九州でナンバーワンのコメの積出港ということが分かりました。そのコメを運ぶために大阪・瀬戸内からたくさんの廻船問屋の船が来て、久留米藩に「船を係留させてくれ」という申請をしています。西回り航路で島原、長崎、伊万里、唐津、博多、下関、瀬戸内を通過して大阪・堂島まで運びたいという申請したものがこれです。江戸後期ですね。ご覧のように、山口県、愛媛県、大阪府、これだけたくさんの船が若津港に係留されていました。この若津港は江戸期から非常に大きな港であったことが分かります。

これが明治 14 年になるとどうなったかを見てみましょう。北海道開拓使が九州各地の港の状況を調べに来た時の報告書が出ていました。米、紙、小麦、生蠟、茶、綿を年間輸出・輸入量が示してあります。ここで輸出と言うのはあくまでも積み出しです。今の海外に出す輸出ではありません。明治 12 年、米が 70 万円で、全部合わせると約 140 万円です。ですから 50% 以上は米と言うことになります。若津は九州米の積出港であったということです。明治 13 年になると 164 万円ほどになります。これが 14, 5 年後にはこの 6 倍になります。900 万円台ということです。特徴的なことは若津港が米の積出港であったということです。これが明治 14 年の資料です。

明治 18 年に明治政府が、補助金を出すので大阪と若津港間に定期航路を作ってくれという命令を出し、できたのが大阪商船、後の三井商船です。明治 18 年には大阪・若津間に定期航路が出ているのです。

それから 5 年後、明治 23 年の銅版画が残っています。これがその当時の若津港です。これは対岸の諸富の方から見た光景になっています。ここが筑後川フェスティバルをやっている会場あたりです。ここに 2 艘、船が止まっていますが、これは深川家の船です。深川家は、江戸期から栄えていた若津港に注目して、物流拠点とするために佐賀から若津に進出してきました。2 艘の船は、明治 13 年に上海まで行って購入してきた鋼鉄船です。これを足掛かりにして造船業、汽船業をこの大川若津で始めます。

その頃、明治 20 年代の回漕店、今でいう旅行代理店ですが、当時は水運が主流ですから、その

江戸時代の筑後川絵図



江戸時代後期の筑後若津港

諸願一件帳 野間 聡

他藩の船籍藩名	申請隻数	4年間累計	備考
周防		29 隻	山口県
伊予		16 隻	愛媛県
大阪		11 隻	大阪府
安芸・筑後		6 隻	広島県・福岡県
長門		3 隻	山口県
豊前・豊後		2 隻	大分県
肥前・筑前・備前・備後		1 隻	佐賀県・福岡県・岡山県
讃岐		1 隻	香川県

※「手津屋」 田主丸の豪商 林田正助の活躍

明治14年 北海道開拓使編纂

「西南諸港報告」による若津港取扱高

単位: 丸

	12年輸入	12年輸出	13年 輸入	13年輸出
米		703, 342		612, 572
紙		102, 952		102, 495
小麦		87, 968		10, 028
生蠟		66, 046		97, 230
茶		59, 797		87, 690
綿		74, 167		208, 384
.....				
	1, 037, 695	1, 398, 667	1, 692, 565	1, 645, 780

本報告書記載では西洋型汽船の若津母港は深川の真岡丸、金丸のみとある
特徴的なのは下駄約25,000円の年間輸出

回漕店にどのような会社があったかを見ていきます。

明治18年 大阪～若津間
定期航路開設(命令航路) 大阪商船(後の商船三井)



明治23年銅版画

ご覧のように筑後若津にはたくさんの汽船・廻船業が店を構えています。上からずっと筑後若津ですね。ここにある大阪商船と言うことは、大阪～若津間の船を扱っていることを意味します。これは佐賀から進出してきた深川汽船ですね。最後に共栄社とあります。これは、瀬戸内の船会社が共同で近代的な会社として運行していた時の会社名です。この会社の名前が先ほどの銅版画に残っています。これが大阪商船の旗です。その下にあるのが実は共栄社のマークを付けた旗です。このように明治の中期にはたくさんの廻船問屋、船会社が若津に出てきています。ところが今はこのような状態です。

私の調べでは、若津は佐賀の真の玄関であったと思います。この若津と佐賀市内の今宿の間を小舟で繋いで、若津で大型船に積み替えて大阪・瀬戸内方面に出て行っています。先ほどと同じ明治23年頃の佐賀市内の船会社・回漕店（今でいう旅行代理店）を描いた銅版画が残っています。こ

筑後肥前の主たる回漕店と取扱船会社 明治20年代初期 若津港・諸富港

回漕店名	所在地	船会社	備考
汽船回漕店 熊井駒次郎	筑後若津	大阪商船会社	武駒本店
汽船回漕業 鮎川組	筑後若津	大阪商船会社	
汽船回漕業 石橋近次郎	筑後若津	深川汽船会社	先後屋
汽船回漕店 石橋作太郎	筑後若津	大阪商船会社	高野屋
汽船回漕店 県立組	筑後若津	大阪商船会社	
汽船回漕問屋 吉原虎之助	筑後新地	深川汽船会社	渡海屋
汽船回漕問屋 川口屋甚吉支店	筑後新地	深川汽船会社	柳川本店
汽船回漕業 石橋利吉	筑後若津		石利
汽船回漕業 木村喜八	筑後若津		
汽船回漕業 熊井善次郎	筑後元濱町		みなとや
汽船回漕問屋 川口屋本店	筑後柳川	深川汽船会社	
汽船回漕問屋 鹿島屋本店	肥前佐賀下今宿	深川汽船会社	諸富支店
汽船問屋 秋田屋	肥前諸富	深川汽船・共栄社	

ここに船の名前が書いてあります。若津丸、金華丸、大川丸、これらは全部深川汽船の船の名前です。佐賀県庁から1kmくらい東に川筋がありますが、そこから若津まで約10kmをこのような小舟に荷物や人を乗せて、大川の若津まで来て、500トン、900トンの船で瀬戸内航路での操業をしていたことが分かってきました。ここにあるのはその一例です。

もう一つ、当時は下今宿と呼ばれていた箇所の汽船問屋の銅版画には、深川汽船の船以外に大阪商船の船名も描かれています。また、これは日本通運の前身だと思いますが、日本運送会社の名前も見えます。このように佐賀と若津の間に大きな舟運の歴史があったことが読み取れる資料が出てきました。100年位前ですら写真はありますが、このようなちゃんとした銅版画が残されていたのです。この若津から佐賀江を通して、

今宿、下今宿までが当時の水運の大きなルートです。

それに若津にとって大きな供給地の一つは久留米ですが、久留米にはこのような大きな廻船問屋はありません。久留米と大川は同じ筑後ですから、他国ではありませんので、若津でいっぺんに扱っていたと考えられます。ただし、明治40年前後には、筑後川汽船会社と言って、久留米と若津間だけの専用の船も通っています。しかし、筑後川の特性上、土砂がよくたまるので、その汽船はすぐ廃止になって、代わりに、久留米と大川の間に軽便鉄道が開通します。

ここから見える場所に、若津港への航路の水深を確保するために導流堤が作られたのですが、その導流堤が、若津港の舟運にどのような影響を与えたかを見てみます。先ほどの明治14年の「西南諸港報告」では160万円とか180万円の積出額でしたが、明治29年にはその6倍の数字が出てきます。これは、福岡県統計書を元に数字を上げています。年間の積出額は、博多港418万円、若松港は石炭が主ですが555万円、大牟田港河口（この当時は大牟田港には大きな船は入れなかったの、小さな船に積んで口之津港まで運び、積み替えていたのであまり大きくない）20

佐賀市下今宿の廻船問屋 若津～佐賀江～下今宿 距離約10km



導流堤完成後 明治29年の若津港

参照 福岡県統計書

港名	輸出金額	輸入金額
博多港	4,181,345	4,574,276
若松港	5,558,746	3,321,004
大牟田河口	2,054,806	460,517
若津港	9,698,744	7,549,674
若津港 明治39年 資料 明治41年 大川町案内	6,237,405 (この時代の大川家具 生産額年間50万円)	5,586,587

5万円、若津港は博多港の倍969万円です。これが年間の積出額です。これは導流堤ができたことでこの若津港がいかに河川港として優秀な港であったかの証拠になってきます。

大川は家具の町とよく言いますが、明治から大正昭和の初めまでは米の町なのです。米蔵が立ち並ぶ街です。ですから、佐賀城内には大きな米蔵地帯がないのです。全部、諸富津、若津まで持ってきて、そこから船に乗せています。ですから佐賀城下には大きな米蔵屋敷を構える必要がないのです。このように若津港が殷賑を極めたことが分かっていただけだと思います。

先ほども述べたように、大川は現在「木工の町」と呼ばれますが、当時の大川家具の年間生産額は、ここにありますように高々50万円なのです。若津港の積出額970万円のうち半分は米です。

若津港はこのように九州で一番大きな物流基地であったことが、福岡県の公的文書の中にちゃんと残っています。

他にも面白いことがいろいろ分かってきました。川港若津では1000トン級の船は浅くて川岸につけられません。どうやって船に乗せていたのかを表す100年前の資料が出てきています。このように筑後川水系では、栈橋機能としても使える荒籠（あらこ）と呼ばれる水制があります。小型の船をここに繋いで乗り込みます。川の真ん中に停泊した600トン、900トンの大型船まで、瀬渡し船と同じ要領でもって乗せています。ですから、若津港の沖には600トン、900トンの大型船、最大で2000トンの船まで来っていますが、その船は川の真ん中に係留しておいて、このような形で乗客、荷物を運んでいたのです。そのことを示したきれいな写真です。ここは、エツの記念碑がある昇開橋のすぐ

川港若津では筑後川の中央に大型船を係留し渡船で岸を連結



明治30年5月 瀬戸内航路の佐賀丸「就航式」
佐賀新聞記事記載有



上流側の風景です。この荒籠は現在は陸化され埋まっています。

明治18年の命令航路から遅れること12年の明治30年5月に初めて地元の汽船会社深川汽船がこの若津から大阪航路を新設しています。その時の就航式の写真も手に入りました。佐賀新聞に掲載されたものと同じ写真が出てきました。この船が佐賀丸で約900トンの船で、鋼鉄船ではなく木造船です。

これは若津丸で280トンくらいの船ですが、その就航式の様子です。ここにあるような川船を大型船の船腹にあけた窓のようなところの下につけて、荷物と人の上げ下ろしを行ったことがはっきりわかります。しかもこの川船は現在筑後地区で使われている船と同じ形をしています。そして、ここは昨年世界遺産になった三重津海軍所と同じ、有明海の6m干満の差を使ったドライドッグ、乾船渠です。これは、我々がいるこの建物の上流の左岸にありました。すぐそこにドライドッグの遺構が埋まっているはずですが、なかなか大川市も福岡県もこういったことに無頓着で調べようとしていないのが現状です。世界遺産に匹敵するようなものが実はこの下に眠っているのです。

それでは、これらの船はどのようなコースを
通って若津港と各地が結ばれたかをここに
挙げています。これは、逓信省長崎海事局の
明治37年から明治41年の「管内交通運輸
に関する報告書」に記載されたものです。資
料によると、長崎－福江間、大川－長崎－沖
縄諸島－宮古、大川－長崎－種子島、鹿児
島－種子島・屋久島、大川－長崎－博多－瀬
戸内－大阪、これだけの航路が若津から出
ています。右側を見てください。月の便数
です。大川から大阪まで月2便定期船が出
ているのです。これが明治37年です。明治
38年も同じ航路です。一番遠いところは
宮古までも出ているのです。今この上流に
味の素の工場がありますが、そこに佐賀セ
メントがありました。そしてこの南に、九州
セメントが明治34年に創業されています
が、今は見る影もありません。そのセメン
トを宮古とかに運んでいます。明治39年
になりますと、東京へもこの大川から出
ています。深川汽船の第一深川丸という船
ですが、大川－長崎－瀬戸内－神戸－東
京が月3便、大川－三角－長崎－鹿児
島－屋久島が月に3便大川から出ている
のです。屋久島の教育委員会の問い合わせ
をしたところ、大川丸と言う船名が郷土史
にもありました。実は向こうで沈んでいる
んです。大川－三角－鹿児島－屋久島と
言った西南諸島にもこの大川からたくさん
出ています。明治41年になりますと、唐
津と韓国の釜山の間にも航路ができます。
これはこの若津からは出ていませんが、県
の命令航路として深川汽船が出しているの
です。

(深川汽船 若津出航の寄港地)						
逓信省長崎海事局管内航路運輸ニ関スル報告						
明治37年～明治41年 航路仕訳書						
報告年	航路	船名	t数	月便数	備考	
第2回 明治37年	長崎～鯛之浦～福江	栄城丸	183t	12		
	大川～長崎～沖縄諸島～宮古	金州丸	346t	2		
	大川～長崎～種子島	若津丸	283t	3		
	鹿児島～種子島・屋久島	大川丸	173t	8		
	大川～長崎～博多～瀬戸内～大阪	佐賀丸	678t	2		
第3回 明治38年	同上	栄城丸		同上		
	同上	金州丸		同上		
	同上	若津丸		同上		
	同上	大川丸		同上		
	同上	佐賀丸		同上		
第4回 明治39年	長崎～鯛之浦～福江	栄城丸		12		
	大川～長崎～瀬戸内～神戸～東京	第一深川丸	703t	3		
	大川(東京線)	佐賀丸		2		
	大川(東京線)	金州丸		2		
	大川～三角～長崎～鹿児島～屋久島	大川丸		3		
	大川(種子島屋久島線)	若津丸		5		
第6回 明治41年	大川～三角～長崎～鹿児島～屋久島	大川丸		3		
	大川～長崎～瀬戸内～神戸～東京	第一深川丸		3		
	大川(東京線)	佐賀丸		2		
	大川～三角～長崎～瀬戸内～神戸	金州丸		2		
	唐津～韓国釜山	若津丸		8		
						県命令

このように通信省のちゃんとした文書、報告書にもきちんと若津と東京・大阪間の航路が明治末までにできていたことが記されています。江戸時代から続くこの若津港は、明治から大正の末期まではいかに重要な港であったかということが理解していただけたと思います。

この船が、私が調べた中では筑後川下流に入ってきた最も大きな船です。この煙突の一本線は、深川嘉一郎が深川汽船を創設していますので、嘉一郎の一をとって深川汽船のマークとして使用したものです。この船の排水トンが2056トン、長さが85mあります。この船の大きさが想像できますか。大中島大川橋の半分位の長さです。この岸が実は大中島です。こちら側の岸が諸富ということになります。こちら側が大川の若津港ということになります。

このように川の真ん中に止めて、瀬渡しと同じようにこのような小さな船で乗せているのです。若津港は川港ですが、このような形で大型船が来ることができたのですが、この大東丸は定期船では使われていません。あまりにも大きな船なので、おそらく深川家がこんな大きな船を買ったということをデモンストレーションする目的でこちらに持ってきた可能性が高いです。喫水深が12mで、当時の筑後川の水深が12mくらいですから、ぎりぎりの船だったということになります。大東丸は大阪港を起点にサイパンとかヤップまで出ています。

ここが深川造船所の全景で、上流側から下流側まで約1km、ここが花宗川です。筑後川フェスティバルの本部があるイベント広場がここです。昇開橋はここを通っていることになります。これと同じ位置を諸富側から写真を撮るとこのような絵になります。これが昇開橋で、ここに小さく見えているのが大川では有名な洋館である三瀬銀行の本店です。明治42年にできていますので、この写真は明治末と言う

筑後川若津入港の最大船舶 大東丸総 2056t 長 85m



深川造船所全景 明治末撮影



ことになります。これが世界遺産になった三重津海軍所の流れをくむ近代的石造りのドライドッグと言うことになりますので、ちゃんとした形で研究保存すれば、導流堤と一緒に世界遺産になってもおかしくはないのではないかと私は思っています。

この深川造船は造船所ですが、川崎重工とかと一緒に鉄道車両もたくさん作っています。一番遠いところでは呉軍港の電車もここで作っています。その時はここで作った電車をこの25トンクレーンで船に乗せて、西回り航路で呉とか博多に納めています。そのための25トンクレーンです。最盛期には1000名の工員がいたのですが、残念ながら今は何ともありません。深川造船所はここですが、今は昇開橋温泉になっています。若津は、川港としては本当にすごい所であったということが理解していただけたと思います。

このような繁栄をもたらしたのは導流堤です。水が引いた時には見ることができます。若津港はこの場所ですし、今いるはなむね館がここです。導流堤は、明治20年に着工し明治23年に完成しますが、これによって、九州の川港に過ぎなかった若津港が隆盛を極めることになります。それを支えたのが、明治政府が作り上げたこの導流堤です。佐賀から出てきてこの港を利用して隆盛を誇った佐賀財閥の多くの商店が大正末期には没落してしまいます。

明治期の近代河川港としての「大川若津港」 それを支えた導流堤

筑後川下流(太川口と称)での近代化産業遺産群の発展



明治23年完成

今回は舟運の発展により隆盛を極め、舟運の衰退により今の状況になった大川若津港に舟運について話をさせていただきました。ご清聴ありがとうございました。

コーディネイター

今の発表は、研究発表でしたので、どなたが反論したい、質問したい方がおられると思います。どなたかコメント、質問はありませんでしょうか。

草刈さん(吉野川)

吉野川から来ました草刈ですが、舟運に関連した遺構・遺物、灯台のような石造物などは残っていないのでしょうか。

本間雄治さん

江戸時代から続く荒籠が残っています。荒籠は水制ですが、栈橋機能も持っています。荒籠は、ここの下流でも見ることができます。筑後川フェスティバルの会場付近に灯台がありました。写真

は残っていますが、その灯台も今はなくなっています。神社仏閣に残っている常夜灯と同じ形ですが、非常に高い灯台が据え付けてありました。先ほどの銅版画にも灯台が載っています。これがその灯台の役目をした常夜灯です。この写真も持っています。高さは大体5～6mあります。

川港の3要素は、船着き場と荷揚げ場とこの灯台、常夜灯なのです。この3つが揃えば、川港と確認できます。若津港はこの3要素を全て備えています。

古賀河川図書館館長

川港には安全を祈るための神社などの信仰的な施設があると思いますが、若津港ではどのようなものがありますか。

本間雄治さん

中世から続く大川の古い港は榎津です。この新しい港という意味で新港に若津の名が付けられます。古い榎津に設けられたのが1800年の歴史を持つ風浪宮です。それと水天宮の下宮もここにあります。若津に設けられた神社は、住吉神社というまさに海の神様です。ちょっと上流の昔の三潆銀行あたりに若津神社がありますが、それ位です。

コーディネイター

駄田井先生、今、利根川・筑後川・吉野川3河川交流を行っておられますが、他の2つの河川を訪問されたときに、「自分たちの所にはない活動」「自分たちの所とは違う感想」をお持ちになっていたら紹介していただけませんか。

駄田井正筑後川流域連携倶楽部理事長

利根川の小貝川には何度か寄せて戴き、中学生・高校生が喜んで馬の世話をしているのを見せて戴きました。川辺を馬に乗って散策するのです。本当にうらやましいなと思いました。ポニーは背丈（背中の尖ったところから足先までが身長、体高と呼ぶ）が低いんですね（1m47cm以下をポニーと呼ぶ）ポニーと言っても色々な種類があるんですね。（ポニーに乗っているのは大学生です。サーカスみたいですね）。実際にサーカスみたいなこともやっておられるんです。



大野重男さん（利根川）

余談になりますが、彼は大学生のボランティアでうちの職員だったんです。今は結婚して子どももいます。人口増にも貢献しているんです。

駄田井正さん（筑後川）

吉野川にも何回か行っていますが、うらやましいのは船を持って毎日動かしておられることです。

筑後川でも是非やりたいなと思っています。

コーディネイター

今、駄田井先生と君で仕事をする機会が多いのですが、私は専門が土木ですので治水・利水といったことが主なテーマになりますが、先生は経済が専門で、観光、地域産業に関連したことを熱心に試みておられるので、吉野川の取組には非常に関心があるのではと思います。一体どのようなビジネスモデルでやっておられるのかを調べて欲しいのですが。

駄田井正さん（筑後川）

吉野川には余り金の臭いはしないんです。吉野川の活動は儲かっていますか。

中村英雄さん（吉野川）

お金ですか。運営は大変なんですよ。乗船料は200円ですから、こんなに安いところはないと思います。これを運営している人達は全部ボランティアです。多いときには一日2000人くらい、4日間で8000人くらい乗っていますから大変ですが、全部ボランティアです。「川を活かして地域づくりをした」と思っている人はたくさんいますから、運営できています。船を維持するのに年間300万円くらいかかっています。乗船代だけではとても足りません。船が古くなってきたので、修理代だけで180万円くらいかかります。船は、作ってからもう8～9年経っていますので傷んできていますが、「まちを良くしよう」という気持ちで皆さんが応援してくれています。

吉野川池田からの参加者（大谷國廣さん）

私は、吉野川の池田から参加している者です。今日見せて戴いた町は、阿波池田と似通ったものを感じます。これだけ栄えた町が、一体どうしてこうなったのかを、単純に明快にお答え戴きたいと思っています。

本間雄治さん（筑後川）

佐賀財閥の御三家と呼ばれる実業家が活動していたのですが、大正末に没落します。理由は、佐賀財閥を支えていた大隈重信公が大正11年に亡くなったこと、大正12年に関東大震災による不況に襲われたこと、第一次世界大戦で弱っていたヨーロッパが復興してきて輸出が途絶えたこと、この3つが重なって、没落してしまいました。最後にとどめを刺したのが鉄道の発展です。

コーディネイター

それでは再開させて戴きます。これまでの3河川の話の終わりにして熊本地震の話に移らせて戴きます。何でこのような企画になったかと申しますと、金子先生の白川わくわくランドを2度訪問させて戴きました。最初は地震発生から一週間後で、NPO法人が管理補助をしている施設でどのようなことが起こったかが気になっていましたので、聞き取り調査をさせて戴きました。今日の筑後川フェスティバルに白川わくわくランドの金子先生と松川さんが出席されることは事前に分かっていましたので、せっかくの機会ですので、九州の河川関連団体の皆様が集まれるこの交流会で直

接お話を聞かせて下さいとお願いしました。金子先生、ご自分が経験されたことをお話し下さい。よろしくお願いいたします。

金子好雄 NPO 法人白川流域リバーネットワーク理事長

こんにちは、熊本から参りました金子です。このような形でお話しをするとは思っていませんでした。のどちょっと面食らっていますが、話をさせて戴きます。皆様方は多分マスコミ等で地震のことはご存じだと思いますので、簡単に報告させて戴きます。一月ほど前の4月14日夜9時26分に、一回目の地震がありました。実は私は東京の出身で、実家は大森なのですが、熊本に来て31年が経ちました。東京は結構地震が多いので、地震があることは当たり前だと思っていました。九州に来ると「九州は地震が少ないぞ」と言われて、確かに



今度の地震に遭うまで、31年間地震に遭った経験がありませんでした。ただ時々、今度地震が起こった布田川断層が動いて震度3くらいの地震が数回起こったくらいです。普段は一発揺れが来て、後はおさまってしまいます。「あ、こんなものか」と思っていました。まさか、4月14日の翌日の夜、正確には翌々日の朝、4月16日午前1時25分、あんな地震が起こるなんて本当に思いませんでした。

今回の地震で思ったのは「4月14日から16日にかけての余震の多さ」です。本当にびっくりしました。14日の前震の後、15日から断水になりました。それまで、熊本で水に苦労するなんて全く思いませんでした。熊本の水道水源は100%地下水です。そのお陰で、断水になっても、水源の水、湧水池の水は出ているのです。給水車が水源に行って水を汲んでくれば、給水できるのです。(揺れ発生)

私は揺れが来るとすぐ情報を見ます。久留米でも揺れるので震度1,2は経験されると思いますが、今頃は震度3くらいまでは「あ、地震があったな」というくらいまでになりました。一種の防衛反応だと思います。最初の頃は、ちょっとガクッと来ると心臓がバクバクしていました。私の家に小さなトイプードルがいるのですが、ちょっと揺れると犬は「ちょっとやばいんじゃないか」とパッと私の顔を見るのです。私が不安そうな顔をしていると、犬がびっくりして過呼吸みたいにハーハー言っているのです。膝の上に乗って離れようとしません。それ以後は、地震が来て不安でも「平気だよ」という顔をするようにしています。私も4月いっぱいくらいまではドキドキしましたが、それ以降は防衛反応のせいか、震度3くらいまでは全然反応しなくなりました。ただ震度4だとさすがにビクッとしますが、最近はお陰様で震度4を越す地震は来ていません。地震の回数も最初のうちは一日100回を超していました。100回を超えると、一日中ずっと揺れている感じですね。私も年になりましたので、年のせいでフラフラしているのか、地震で揺れているのか分からなくなってきました。犬を抱いていると、犬がバクバクしているのか自分がバクバクしているのか、あるいは地震が揺れているのか分からなくなります。

私の従兄弟は医者ですが、「ドキッとしたときは血栓ができやすくて、心筋梗塞や脳梗塞になりやすい。あんまりストレスを感じるな」と忠告してくれました。「ストレスを感じるな。平静になるように努力しろ」と言われました。確かにそれは重要なことで、地震が発生して2週間後くらいになると少し地震の回数が減ってきました。疲れているので本当によく眠れるんですよ。それまでは、ちょっと揺れるだけで、ドキッとしてすぐに目が覚めていましたが、そうすると夜中に震度3くらいの地震があっても全然起きません。4月の終わりくらいまでは、家の中で一番安全なリビングの横に連れ合いと犬と寝ていました。5月になって「もう大丈夫かな」と思って、2階の寝室に寝るようにしたのですが、ズボンはいはいたまま、車のキーは持ったままです。今日も車で来たんですが、車の中には今でも避難用具、テントがそのまま入っています。

川のことはこれまで長くやって来て、救命救助やレスキューの資格も持っているのですが、まさか、こんなにも地震が怖いものだとは思っていませんでした。水害は終わってしまうと「もう大丈夫」と思えますし、やり過ごせます。今回の地震は14日に来て、「もうないだろう」と思っているところに16日の本震が来ました。疲れてリビングでうたた寝しているところにドンとききました。本当に揺れました。電気が切れてテレビが消えたので、懐中電灯を探したのは憶えています、その後のことは憶えていません。後で見たら、リビングに置いていた食器戸棚のドアが開いて中のものが全部落ちていましたので、すごい音がしたはずなのですが、憶えていないのです。あんな時は結構大事なものが割れるんですよ。あんまり良いものなので使わなくて置いていたベネチアグラスが一回も使わないうちに割れてしまいました。熊本に来る前にお寿司屋さんで貰った大きな湯飲みは割れないんです。割れたときに大きな音がしたはずなのに全然記憶がありません。人間ってそんなもんなんだなと思いました。

今日は私と一緒に熊本から松川喜美子さんに来て貰っています。彼女は去年の8月から白川地域防災センター白川わくわくランドで勤務しています。白川わくわくランドの状況を報告させて貰います。

白川わくわくランドができたのは2000年の6月ですから、丸々16年経っています。白川の上流部から河口までの50kmで活動しています。川の活動を通して川での救助の技術や哲学と言ったものを学んできていたので、川での活動には自信がありました。それらの活動の中で、九州の消防の方々を中心に結成された「レスキュー友の会」とのお付き合いがありました。今北海道にいる藤原久夫さんが皆さんに連絡して「熊本が今、酷いことになっているので、何とかしてやれよ」とレスキュー友の会に連絡されました。

14日に地震が発生して、私の所は15日の午前中までは水道が出たのですが、水が出なくなったので、水だけは確保しようと思ってスーパーに行ったのですが、見事に水だけがないのです。水が止まると焦るんです。これは台風の時の話しですが、私はいつも連れ合いに「災害の時は必ず風呂桶に水を貯めろ」と言い続けてきました。今回私は何も言わなかったのに、私の連れ合いはそれを全部やってくれていました。ご飯を炊いて、風呂桶に水を一杯貯めてくれていました。それで助かったのですが、飲み水だけは別に確保する必要がありましたので買いに行ったのですが、買えませんでした。誰に聞いても水が無いと言います。

藤原さんからの要請を受けてレスキュー友の会の皆さん達が自費で水やその他の救援物資を購入して送ってくれることになりました。私たちのグループに白川わくわく探検隊という組織があり

ますが、そこに「何が必要なのかの優先順位を教えて欲しい」と連絡がありましたので、必要な品物のリストを作って送りました。その物資を自分たちで車を運転して持ってきてくれました。

最初の便が来たのが4月17日です。届くのは良いのですが、置き場に困るのです。行政の方はペットボトルが5000本以上でないと受け付けてくれません。纏まったものならば行政が取り扱いますが、個人が送るものですからそんな数にはなりません。たまたま、わんぱく探検隊メンバーの渡辺というのが自分で受け取って、近くの学校に持って行って配ろうと思ったら、救援物資を巡って争いになったそうです。

「これはちょっとまずい」ということになり、別な方法で白川流域に配る方



法を考えることにしました。まずは、白川わくわくランドにとりあえず救援物資を置くことにしたのですが、国の施設ですから勝手に置くことはできません。私が河川事務所と交渉したところ、「個人が受けるのは問題だが、NPO法人白川リバーネットワークが受け入れるのであれば良い」ということになり、物資の受け入れが可能になりました。

数も限られるのでまずは流域のメンバーに「このような救援物資があります。配るだけの人手がありませんので、必要な方は白川わくわくランドに取りに来て下さい」と連絡しました。フェイスブックを使って物を集めたのですが、発信先を拡げると無制限に物が集まりますので、消防友の会の方々に絞って情報を流しました。ところが友の会の方が物を集めるときに「熊本が大変だから物資を集めている」と話されると、それが拡散してしまいます。今でも残っていますが長野県から水が送られてきました。その方は消防とは関係のない方でした。

これが大きな問題になりました。「水が足りない」となると、ずっと水が足りない状態が続いていることになるのです。本当は、必要な物は時間とともに変わっていきます。始めは水でしたが、食べ物(主食に近い物)に変わります。あるいは、赤ちゃんのいるところでしたら、オムツとかの乳児関係が必要です。このように、必要な物は変わりますが、その状況は現場にいないと分かりません。ところが、情報だけは「水が足りない」となるとそれが何時までも伝言ゲームのように広がって行って、水が送られてきます。今回一番被害を受けたのは熊本市街の南側にある益城町、そのさらに南にある西原村、そして東側の南阿蘇町です。その益城の映像がテレビでずっと流れました。「服が足りない、下着が足りない」と映像が流れると、それを見た方が「下着を送ろう、服を送ろう」ということになるのです。気持ちは「足りないんだから、送ってあげよう」という善意なんです。ところが、足りない人は限られているのです。そんなことは見ている人には分からないんです。最初の情報が流れたままだと、子どもさんから「送ります」を水が送られてくるのです。

私たちの団体も、災害支援の業務をするところではなく、子ども達を相手にする業務を行っていますので、災害時に何をどうして良いのかが分かりません。これは業務なのかボランティアなのか。勤務時間が終わったら職員は返さなければいけませんが、受入の仲介をする人は「自分たちも善意でやっているのだから、あなた方もボランティア精神を発揮しろよ」思っておられます。「白川わくわくランドに物資を届けるから鍵を貸してくれ」とか言われる方もおられますが、さすがにそれはできません。結局



「白川出張所には24時間誰かいますので、言って戴ければ物資の管理はできます」と国交省の方に云って戴いたので、鍵を貸すことなく解決しました。

普段、考えてもいなかったことが次々に起こってくるという感じです。流域の方々に取りに来て戴いて何とか捌くことができました。今でも信州から送られてきた水が箱で積んであります。私の話はこのへんにして、実際現場で対応した白川わくわくランドの職員の松川さんの話を聞いて戴きたいと思います。

松川喜美子白川わくわくランド

白川わくわくランドのスタッフの松川と申します。元々、白川わくわくランドは河川のための防災センターという意識はあって、私もスタッフとして働いていますので、洪水で水が溢れたときにどこに連絡を取るかということは認識していました。しかし、地震の時に私たちがどのように対応するかについては国交省との間で詰まっていませんでした。建物は国交省の建物、そこで私たちは運営だけをするという状況ですから、何もかもを私たちが決められない建物だったので、先ずそのことで慌てました。

実際にはNPO法人として活動している事業もあるので、行事が中止になりますから、その連絡も取らなくてはいけないのですが、国交省はてんでこ舞いで、一週間か二週間はこちらからメールしても電話しても返事がありません。連絡も取れないし、自分たちで勝手に判断できないし、というのが一番困ったことです。実際に慌てたし、悩んだし、それでも皆さんは「ボランティアに行くよ」と言ってくれるのですが、どこまで対応できるかも分かりません。今回たまたまスタッフの家は壊れたりはしませんでした。旦那は仕事に出てしまって、1人で家にいるのは不安なので、白川わくわくランドに避難する気持ちで10日間ほど出勤していました。

「自分たちは何をしなければならなかったのか。こんな場合はどんな対応をしなければならなかったのか」と考えるとき、前もってそれを考えていなかった、計画していなかったことが我々の悪かった点の要因の一つです。地域河川防災センターと名前が付いていますし、大きくは国交省の建物なので「何かしてくれるのではないか」との期待は当然あります。実際、1回目の14日の地震のあと、夜になって避難に来られた方がおられました。たまたま私たちがそこにいたし、建物は非常

に頑丈だったので、「しばらくここにいきましょう」と言うことになりましたが、後になって出張所の方が「こちらに畳がありますから」と言われて、そちらに移って行かれました。

1 回目の地震の時には水槽の水が飛び出したくらいで、棚が壊れたりもしませんでした。2 回目の地震の時には白川わくわくランドも被害があり、二階の天井が一気に落ちてしまいました。一階のドアも完全に壊れて開かなくなってしまいました。二回目が来ると思っていなかったのですが、一回目の地震の後、水槽に水を入れ直していたのですが、全部溢れて水浸しになってしまいました。わくわくランドも一週間水が出なかったのも、水がない状態でしたが、すぐ横に白川があるので、開館だけして、近くの方がトイレを借りに来られたとき



に、トイレ対応だけをしました。「2 時間も 3 時間も水が流せるトイレを探しているのですが」と言って来られた方がいらっしゃったので、濁った水でしたが、トイレ対応をしていました。

1 階のドアが壊れていて開館ができませんので、トイレ対応と物資を受け取ることをやっています。皆さんが色々やって戴くので我々も何か返さないといけないとは思いますが、実際に皆さんが来られても、どこに泊めてあげれば良いのか、家に泊めるのはもっと怖いし、「どうすれば良いんだろう」「実際に来られると困るな」という気持ちです。白川わくわくランドも手一杯なんです。「何時になるか分からないけど荷物が届きます」というのが伝わってきます。通常スタッフが 3 名なので、何時から何時まで働こうと決められない状況です。「常駐かな」「言われたことはやらなきゃいけないのかな」という感じです。私たちも生きていますし、家にも帰らなければいけないのですが、水や食べ物は何とかなるだろうと思って、物を集め、取りに来て貰って 10 日から 1 ヶ月くらい配っていました。

2 週間くらいで国交省と連絡が取れてからは、色々修理して戴いて、通常通りの業務に段々戻っていきましました。予め、災害時対応を考えていなかったことが、「心に残っている」事柄です。実際に 2 回も地震が起こるなんて思わないですし、防災センターですから日頃から子ども達にサバイバル術や、「実際の災害の時には一日にこれくらい水がいるんだよ」と教えていますが、それは洪水の時の対応であって地震の対応ではないので、自分たちで一生懸命教えていたのに何にも役に立ちませんでした。実際はそんな感じでした。

コーディネイター

有り難うございました。一番身近な我々の仲間から話を聞かなければいけないと思って、今聞き取り調査を行っています。このように話を聞くだけなら問題ないのですが、報告書に纏めようとすると、あっちに気を使い、こっちに気を使い、なかなか文章に纏まりません。筑後川新聞に投稿した第 1 弾は私の見聞録ですからこのままで良いのですが、第 2 弾の分析・提言の所はもう少し検証が必要かなと考えて、原稿をストップしています。

前回の調査では「災害ボランティア」を取り上げ、うきは町、日田市、阿蘇市などで聞き取りを

行い、社会福祉協議会が災害ボランティア組織をきちんと運営していることに感銘を受けたのですが、その時言われたことが印象に残っています。「災害があるレベルを超えると社会福祉協議会だけでは動かなくなる。災害ボランティアにレベルがあるんです。」と言われました。今回の熊本地震は明らかにそのレベルを超えていると思います。「川内川災害で学び、北部九州豪雨で調査し、今回の熊本地震で学んだものをどのように組織化するかを早く纏めてください」と、北部九州河川利用協会の山本専務からも要請を受けているのですが、余り知恵がないので今悩んでいるところです。そんな段階ですので、今は現場の仲間の声を聞いて戴いた方が良くと思い、お二人に発表をお願いしました。

今日の話をもどのように纏めて、国交省等の関連機関と話をしていけば良いかが浮かんでいません。いずれにしろ、何かやらなければいけない作業であることは理解しています。今年 1 年くらいかけて熊本地震のことを勉強していきたいと思っています。

本当は、NPO 法人の皆様達から活動報告も受けたかったのですが、今日はお祭りだったこと、熊本地震の後だったことで、このような構成になりました。ご了承下さい。

これで九州河川災害ネットワーク交流会議を終了させて戴きます。皆様、最後までご参加戴きまして本当に有り難うございました。

